



た

また妻が東郷湖畔の古本屋汽水空港で勧められて買って帰った一冊がきっかけになった。ぼくも前から行きたいと思っていた本屋さんなのだが、まだ行けていない。せっかくなので妻が先に行つて一冊得たのだから、ぼくがいつか行つたときには、この本が及ぼした作用を土産にしよう。

去年の夏に畑を借りることになって、今年で二度目の夏から秋を迎えた。初めは手取り足取り、種や苗、農具まで提供して教えてくれたNさんだったが、「いつまでも甘えちよーなよ」とばかりに、この夏からはまったく放任になった。Nさんのホームファームからはちよつと距離があるので、今夏の異常な暑さに「もう勘弁、そつちでやってごせ」となつても何ら不思議ではないけれども。

前年教わつたとおりにやつてもよかつたのだが、自主性を欠いた畑作の帰結として、どこに何を植えていたのだったかよくわからなくなつてしまつたのと、一昨年何が植わつていたのかぼくには知るよしもないのと、連作障害対策が七面倒くさくてやる気が殺がれていた。

妻がその本を手にはしていると、汽水空港のご夫妻が、「その本、すごくいいですよ。うちもそのやり方で野

菜作っていますよ。」

と声をかけられたそうで、俄然妻も興味をひかれたらしい。以後ずっとダイニングテーブルの上に置いて、頻繁に見ている。事典のような使い方もするので、手元から離せない。

『1㎡からはじめる自然菜園』というのがその本である。今のぼくの理解で概略をまとめると、耕すことも施肥もしない。農薬も使わない。1㎡単位で循環型の環境を作り、野菜同士の相性や適性に合わせて連作を可能にする。昔伊藤ルイさんに勧められて読んだクロポトキンの『相互扶助論』の畑作編といった感じだ。植物、昆虫、土中の微生物などの相互扶助によつて野菜にも土にも負担をかけない持続可能な野菜づくりを目指す。施肥はしないというよりそこにあるものを使うと言つた方がいい。1㎡の周囲に麦やクローバーなどの草を育て、肥料、避暑、避寒、保湿など様々な用途に使う。収穫の効率を上げる必要がなく、去年などかえつて取れすぎて困つてしまつた暢気な耕作者にとつては、ぴったりである。クリムゾンクローバーは咲いたら花畑みたいになりそうで期待が膨らむ。

初めからうまくいくはずないと思つているから、理科の実験をしているような心持ちで、畑を見に行くのが実に楽しい。

空き家 26

木幡智恵美

生家の思い出⑬

高校三年生になる前の春休み、毎年祖母が参加する隣保の人たちとの慰安旅行に付いて行つた。バスで松江の旅館まで行き、演芸を見ながら昼食を摂つたり、歓談したりして過ごすのだ。隣保の人とそう話をするのもなかつたのに、なぜ行く気になつたのか。あの着物の件から、祖母に対してこれまで以上に気を許せるようになっていたのかもしれない。

ところが、その祖母は旅行から帰るとすぐ、「風邪ひいたかもしれん」と寝込んでしまった。祖母が臥せるのを見たのは、この時が初めてだ。

暖かくなつても祖母は布団をあげようとせず、食事やトイレ以外は横になることが増えていった。その頃、尼崎に住む伯父が退職後に田舎で過ごすために家を建て始めていた。祖母が建設中の建物が見たいというので、リアカーに乗せ、伯母と一緒に見に行つた。家の外で祖母を見るのはそれが最後になる。

かかりつけ医によると、祖母は末期の肺がんで、手の施しようがないとのことだった。呼吸が辛くなると、太い針を胸に刺し水を抜かれた。血に染まつた胸水は洗面器一杯出、その度に祖母は小さくなつていった。祖母がほほ寝たきりになつたため、母は仕事には出ず介護に専念するようになる。だんだん細くなる祖母を抱えて母はオマルで用を足させ、毎日身体を拭き、献身的な介護をした。祖母が身体を触れさせるのは母だけだった。

食も細くなつたある日、スズキの刺身が食べたいという祖母に、父はセイゴを捕つてきて捌き、枕元に差し出した。ほんのひと切れだったけど、口に入れた祖母の満足げな顔が忘れられない。そのうち話す力も無くなり、「ま」と母の名(正江)を言うだけになった。その合図で母は祖母の要望を察し、動くのだ。

元の半分ほどの身体になりながらも何とか年を越したが、三学期が始まつて十日ほど経つた日の昼前、父が学校に迎えに来た。数え年八十一歳で祖母は亡くなつた。

私は毎日墓に参つた。墓前では受験勉強にかこつけて世話をしなかつたことを祖母に繰り返して詫言。そして迎えた合格発表の日、報せを受けるとすぐに墓へと走つた。

30代フリーター 前回、「愛とは、あなたが持つていないものを与えることだ」という、ラカンのわけのわからない愛の定義の話をしたが、これに限らず、彼の言っていることは常人にはおおよそ理解不能だ。

年金生活者 ラカンがつくりだした精神分析の概念のひとつに「4つの言説」というのがある。あまりに難しいので、私は苦しまぎれに、自分の慣れ親しんできた吉本隆明の使う概念をそれに当てはめて考えてみた。

30代 お疲れさん。

年金 「4つの言説」とは「主人の言説」「大学の言説」「ヒステリー者の言説」「分析家の言説」を言う。どの言説も登場する役者は同じで、「主体」「主人」「知」「対象a」の4者だ。これらの役者は言説によって異なる役を演じる。〈真理〉〈動因〉〈他者〉〈生産物〉がその役だ。

この「4つの言説」を吉本の考えに対応させると、「主人の言説」は「国家」の言説に、「大学の言説」は「知識人」

の言説に、「ヒステリー者の言説」は「大衆」の言説に、「分析家の言説」は「思想家」の言説に相当する。

「主人の言説」では、〈真理〉としての「主体」に支えられた「主人」が〈動因〉となつて、〈他者〉である「知」に働きかけ、「対象a」を生産物として生み出す。国家の政権担当者が国民に支えられて（国民を代表して）知識人の集団の官僚に働きかけ、サービスを生み出す過程は、この言説のひとつと考えることができる。

「大学の言説」では、〈真理〉に役どころを替えた「主人」をバックに、「知」が〈動因〉となつて「対象a」に働きかけ、「主体」を生み出させる。知識人が世界についての知識を収集し、それを広めて、啓蒙された人たちを増やしていくのも、この言説に該当する。

30代 「対象a」とは何のことだ。

年金 ラカン独特の用語で、いろんな解釈ができる。私は、人間が生涯にわたつてそこに帰りたいと願っている母胎の楽園を象徴、代替するあらゆるも

のを指すと考えている。

「ヒステリー者の言説」では、この「対象a」が〈真理〉を演じ、それに突き動かされる「主体」が「主人」に働きかけ、「知」を生み出させる。国民大衆が日々の労働や消費、ときに選挙を通して為政者に働きかけ、世の中を改良する知恵をしばらくらせる過程をこの言説はあらわしている。

そして「分析家の言説」では、「知」に裏打ちされた「対象a」が「主体」に働きかけ、「主人」を生産物に置き換えば「主人」を生産物の地位に置く。知的上昇を遂げた知識人が、「大衆の原像」を自らの中に繰り込み、思想する者となつて為政者を相対化する過程はこの言説に属する。

30代 小難しいこじつけを聞かされて

いる気がする。
年金 吉本隆明は『幸福論』という著書の中で、自分のしてきた文芸批評の「勉強法あるいは研究法」を打ち明けている。「例えば、『源氏物語』を角川文庫で読んだとします。そうする

と、その中で必ず数カ所あるわけですよ、おやつ、これはちよつと、ほかの本にもこれに似たところがあつたな、とか、このことについて詳しく書いてある本を読みたいな、と思うところが。そうしたら、ほかのものを連鎖させるんです」

これを私なりにまねてみたのが、ここまでやってきた「こじけつ」だ。せつかくだからそれをさらに進めてみよう。

30代 ジイさん、大丈夫か。

年金 「4つの言説」は吉本の考察した幻想の各領域にも対応させることができる。すなわち「主人の言説」は「共同幻想」に、「大学の言説」は「個人幻想」に、「ヒステリー者の言説」は「対幻想」に、それぞれ属し、「分析家の言説」は、各幻想領域にまたがるものとして扱うことができる。「ヒステリー者の言説」が対幻想に属すると考えられるのは、ラカンがヒステリーという病気を、女性であるとはどういうことを問う病だとしているからだ。

ニュース日記 895
中村 礼治

共通の構造を手さぐりする

「4つの言説」はさらに吉本の幻想論を媒介にして、柄谷行人の交換様式論にも対応させることができる。柄谷の想定する交換様式AⅡ互酬（贈与と返礼）は「ヒステリー者の言説」と、同BⅡ服従と保護（略取と再分配）は「主人の言説」と、同CⅡ商品交換（貨幣と商品）

30代 なぜ「分析家の言説」が「大衆の原像」とかわるんだ。

年金 ふだんは天下国家のことや、質問や芸術のことには目もくれず、家族や親しい人たちとの生活を第一に考えて暮らす人間のイメージを吉本は「大衆の原像」と呼び、それを「たえずみずからのなかに繰り込む」（「情況とはなにか」、1966年）ことを「知識人の思想的な課題」（同）と考えた。

「分析家の言説」は「知」を持つ分析家が「対象a」と化すことによつて、クライアントである「主体」を「主人」の支配から解放する過程を表している。これは知識人が、知識まみれのおのれの中に「大衆の原像」を据えることによつて、たとえば国民を知識人による啓蒙の対象とか、為政者による操作の対象として扱う支配の論理を解体する過程と同一の構造と行うことができる。